研究テーマ：地域農産物及び自然資源の高度利用による中山間地域農林業の再生 ―在来機能性作物の栽培・加工・最終消費形態の組織的普及開発を主として―	
研究代表者：藤田　泉（生命環境学部　教授）	連絡先　：ifujita@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：山田學教授、猪谷富雄教授、新美善行教授、黒木英二教授、四方康行教授、前川俊清准教授、増田泰三准教授、村田和賀准教授、堀田学准教授、福永准教授、	

Ⅰ　研究期間　　平成 19 年 4 月～平成 22 年 3 月

Ⅱ　活動主体

県立広島大学生命環境学部研究チーム　研究代表　生命環境学部　藤　田　泉、他１１名
君田地域振興懇話会　会長　畠　原　峰　男、他

Ⅲ　研究目的

1　少子高齢化による担い手不足地域の耕作放棄地の有効利用と新規作物による健康・安全・安心を核とした生物資源利用の循環型地 域経済構造の構築を最大目標とする。

2　中山間地域等の鳥獣害被害の可能性が少なく、かつ軽量作物の対象により高齢者でも栽培可能な機能性作物の特産化と地域ブランド化を図り、農業生産構造の再編を目指す。

3　広島県在来の機能性植物の開発利用研究と漢方薬草を柱とする作物栽培による生態系重視の里山景観整備と観光資源化による地域振興を図る。

4　産学官プロジェクトチーム編成により、市場調査等の基本条件を分析し、機能性作物の生産から加工、商品化の一貫体系の確立と総合的科学研究により独自性の高い産業化を図る。

5　上述の研究目的の実現化の具体的目標としてとして薬膳料理の消費形態の確立と食材の組織的生産を突破口とする。

Ⅳ　研究計画（平成 20 年度）

1　薬膳料理等の食材の生産体系、生産圃場の確定と作付け、料理メニューの確定と販売の一部開始及び市場調査を行い、実施普及体制を整備する。

2　初年度に引き続き在来機能性作物、薬草類の賦存調査、成分分析も行う。また、薬樹を中心として耕作放棄地等への植物選定と試験作付けも行う。

3　組織化された生産者を中核として機能性作物、商品開発可能性のある薬草類等の周辺農家への普及拡大化を実施する。

4　薬膳料理を中心とした最終消費形態の技術者養成を行い、最終商品の普及・安定化へ向けての市場調査を行う。

5　対象地域の農業生産構造、産学官の連携可能性、機能性作物、漢方薬草等の商品可能性、生産体系整備等の基本計画と現状分析を引き続き課題とする。また、特定作物に関しては商品化に向けてのパッケージ、販売戦略、商標登録等の具体的課題にも着手する。

Ⅴ　研究成果の概要

第 2 年目の主要目標である薬膳料理のメニュー開発と食材の生産体系をはじめ、その商品化計画及び販売実施、周辺農家への普及拡大活動、市場調査等についてはほぼ目標を達成した。ただし、第 2 年目の目標である日中共同研究推進のための代表者の派遣に関しては、四川地震により、関係機関の被害発生のため見送ることとした。

特に第２年目は機能性植物の展示・試験栽培に向けての土地の借り上げ協議を行い、在来機能性作物の原種作物の栽培と採種を行った。この作業には生命環境学部学生クラブのファーマーズハンズにも協力を仰いだ。

第２年目は約２０回の協議・会合・作業等の研究活動の実績により、新たなメニュー開発をはじめ、生産者の普及拡大と 3 年目の課題設定に関して関係者間での共通認識を醸成できた。

これらの協議から、君田地域振興懇話会に生産者部会と食材加工・メニュー開発部会を設置し、初期の目的を達成するために組織的活動へと展開した。さらに、販売・流通部会の設置に向けて協議に入った。

また、平成２０年度の活動を総括するため、2009 年 3 月 8 日にシンポジウムを開催し、「地域の素晴らしさの発見・創造と地域組織・大学連携」として赤岡学長に基調講演に行っていただいた後、藤田が「重点研究の 2 年間の実績と最終目標」、黒木教授が「地域資源を活用した商品開発戦略」を報告し、記念講演として、広島ＴＶ、広島ＦＭ　パーソナリティーの南田洋　氏に「いなかの力―美味しい、楽しい、三次のブランド力を高めるために―」を行い、総合討論・質疑で締めくくった。参加者は約 80 名であった。

なお、シンポジウムを除く協議や会合は毎回夜鍋作業となり、関係者の熱意と行動力に支えられて活動できた。これら平成 20 年度の研究活動内容は中国新聞に 4 回余りにわたり報道された。

Ⅵ　直接的効果

1　平成２０年３月には君田 21 において薬膳料理の商品化を行い、その後の売り上げも順調であり、関係者における地域活動の具体的イメージの共有ができている。

なお、君田温泉の売り上げは経済状況や石見銀山のユネスコ世界遺産登録の影響により、前年比の 95%位となっているが、薬膳料理を販売している２１番館の売り上げは前年比約 112%、約 2,000 人の増加となり成果が顕著となっている。

2　第 2 年度目である平成 20 年には 20 回余りの研究・協議活動を行い、試験栽培・展示栽培地での在来機能性作物の栽培・採種を行い、普及体制を整えた。

3　平成 21 年 4 月には、過去 2 年間の成果と実績のもと、「薬膳弁当」の製作を行い順調な販売を行って、生産者の組織化の拡充と食材供給体制の確立化へと展開している。

4　本研究活動はマスコミにも複数回取り上げられ、県内外への波及効果も大きく、県立広島大学の社会貢献としての実績を蓄積している。

5　本研究活動に三次市の観光拠点である広島三次ワイナリーの関係者も参加し、交流拠点の拡充化に向けて協働研究にも着手した。